

全さんま棒受網地域漁業復興プロジェクト（宮城地区部会・大型）

事業実施者：全国さんま棒受網漁業協同組合

使用船舶名：第八十八花咲丸（199トン）

支援期間：平成28年8月20日～令和元年8月19日

（さんま棒受網漁業）

（取組の内容）

● 省エネ・省コスト化：

同一船型船の建造による建造コストの削減並びに省エネ型船、大口径固定ピッチプロペラ、低燃費型機関及びLED漁灯の採用等による燃油使用量の削減を図る。

● 漁船の安全性・労働環境の向上：

二重バラスタンクの設置等による船体復元性の改善、省力機器の導入等により、労働環境及び乗組員の労働意欲の向上を図る。

● 公海さんま操業への展開：

国際的な資源管理の下、本漁期（8～12月）前の5～7月に公海さんま操業（ロシア加工母船への洋上売魚及び単独操業）を実施し、国内供給量を増加させ、公海での漁獲実績を積み上げる。

● 漁獲物の付加価値向上・高度衛生化：

船上箱詰とブロック凍結品の生産及び高度衛生管理により、流通段階における付加価値向上及び衛生管理を図る。



新船導入 第八十八花咲丸



女川港 水揚げ



洋上売魚風景（ロシア加工母船フセフォロド・シビルツェフ32,096トン）

下写真提供：国立研究開発法人 水産研究・教育機構

（事業の成果）

● 同一船型船の建造、被代船からの漁労機器等の移設により建造コストが大幅に削減（4千万円以上）された。

● 漁場が相当遠方に形成されたこと、魚影が薄く探索時間が長かったこと等により、燃油使用量が、1年目529kℓ（従来比10.7%削減）、2年目576kℓ（2.8%削減）、3年目（公海さんま操業を含む）845kℓ（13.0%削減）となった。

● 主機関の低重化を実施したことにより、大幅な低重心となり復元性が改善され、安全性が向上した。

● 省力機械の増設（サイドローラー・ミニポールローラー）により、操業時の網揚作業の軽労化が進捗した。

● 本漁期の水揚量（3年平均）は、1,444トンで計画（2,560トン）の56%であったが、魚価が上昇したため水揚金額（3年平均）は、330百万円と計画（325百万円）の102%となった。

3年目に計画変更して新たに実施した公海操業は、漁場が極端に遠方に形成され、魚影も薄かったため、水揚量は、304トン（計画661トンの46.0%）、水揚金額は、18百万円（計画61百万円）の29.5%であった。

● 船上箱詰（3年平均）は、魚体サイズが小さくニーズと合致しなかったため実績30箱で計画（490箱）の6.1%となった。また、ブロック凍結品（3年平均）は、魚価が安く採算が合わなかったため生産を控えた結果実績303箱で計画（1,000箱）の30.3%となった。

3年目の公海操業では、計画にはなかったが、漁場からの距離が遠かったため、船上箱詰46箱、ブロック凍結272箱を実施した。

● 海水滅菌装置を導入したことにより、さんまの鮮度保持が向上するとともに、新しい市場の整備により高度な衛生管理が確立され、安心安全で高品質な漁獲物の供給ができた。